

第6章 敬 尊敬語

問 269 次の尊敬語の現代語訳を書け。

- (1) のたまはす (2) おもほす (3) きこしめす
(4) おぼす (5) たてまつる

問 270 に、あてはまる尊敬の動詞を記せ。

- (1) 「あの男、こち寄れ」と、 ければ、
(更級日記)

〔訳〕「その男、こちらへ来い」と、お呼びになったので、

- (2) 親王は で、明かし給うてけり。
(伊勢物語)

〔訳〕親王はおやすみにならないで、夜を明かしなされた。

問 271 文中より尊敬の動詞を抜き出し、終止形で答えよ。

- (1) われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。
(竹取物語)
(2) 子となりたまふべき人なめり。
(竹取物語)
(3) 仏、あはれとおぼしめしたりけるなめり。
(宇治拾遺物語)
(4) 「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と、おほせらるれば、
(枕草子)

問 272 線を、尊敬語に注意して現代語訳せよ。

- (1) これみな人のしろしめしたることなれば、
(大鏡)
(2) 仁和の帝、親王におはしましける時に、人に若菜たまひける (時
ノ) 御歌。
(古今集)

● 尊敬語

話し手(書き手)が、話題の中の動作の主(動作をする人)に対して敬意を表す言い方。

親ののたまふことを、
(竹取物語)

(親ガオツシャルコトヲ)

……親に対する敬意を表す

● 主な尊敬語一覧

尊敬語	現代語訳
おほとのごもる	おやすみになる
おはす	いらっしやる
おはします	おいでになる
おぼす	おっしゃる
のたまふ	
のたまはす	
おぼす	
おもほす	お思いになる
おぼしめす	
きこす	お聞きになる
きこしめす	
しろしめす	ご存じである
	お治めになる
めす	お呼びになる
	お召しになる
	召しあがる

たてまつる	召しあがる
まゐる	お召しになる
たまふ	お乗りになる
たまはす	お与えになる
くたまふ	
くたぶ	
くたうぶ	おろになる
くおはす	くなさる
くおはします	

謙讓語

問 273 次の謙讓語の現代語訳を書け。

- (1) うけたまはる (2) たてまつる (3) はべり
(4) きこえさす (5) 啓す

問 274 文中より謙讓語を抜き出し、終止形で答えよ。

- (1) 公になにごともにつかうまつらんにたへたる者になむ。 (大鏡)
(2) 御息所、はかなき心地に悩み給ひてまかでなむとし給ふ。 (源氏物語)
(3) 身を捨てて額をつき、(仏に) 祈り申すほどに、 (更級日記)
(4) 会ひ参らせむとて、かくありくなり。 (宇治拾遺物語)

問 275 に、あてはまる謙讓の動詞を記せ。

- (1) 緑いまだ ず。

(竹取物語)

〔訳〕 ほうびをまだいただかない。

- (2) あはれなりつること、忍びやかに 。

(源氏物語)

〔訳〕 しみじみとしたことを、ひっそりと天皇に申しあげる。

問 276 謙讓語に注意しながら、全文を現代語訳せよ。

- (1) 養ひたてまつりたる我が子を、何人か迎へきこえむ。 (竹取物語)
(2) 久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で、聞こえけり。 (伊勢物語)

● 謙讓語

話し手(書き手)が、話題の中の動作の相手(動作を受ける人)に対して敬意を表す言い方。

かぐや姫を養ひたてまつる (竹取物語)
(竹取ノ翁ハ、カグヤ姫ヲ養ヒ申シアゲル)

……かぐや姫に対する敬意を表す

● 主な謙讓語一覧

謙讓語	現代語訳
うけたまはる	お聞きする
きこゆ	
きこえさす	申しあげる
まうす	
奏す	天皇に申しあげる
啓す	皇后に申しあげる
さぶらふ	おそばにいます
はべり	お仕えする
たまはる	いただく
たてまつる	さしあげる
つかうまつる	お仕えする
	してさしあげる
まゐる	お伺いする
	さしあげる
	してさしあげる

まゐらす	さしあげる
まかる	退出する
まかつ	おいとまする
ゝたてまつる	
ゝまうす	ゝ申しあげる
ゝまゐらす	
ゝきこゆ	ゝいたす
ゝきこえさす	

丁寧語

問 277 文中から丁寧語を抜き出せ。

- (1) いつよりも、ことに今日は尊く覚え侍りつる。
(徒然草)
- (2) 君をのろひまゐらせてさぶらふなり。
(宇治拾遺物語)

問 278 線の丁寧語は、(ア)・(イ)のどちらか。

- (1) いとあはれなることも侍りき。
(方丈記)
- (2) 少しも物詣での気色とも見え候はず。
(平家物語)
- (3) 和歌の船に乗りはべらむ。
(大鏡)
- (4) これよりめづらしきことは候ひなむや。
(源氏物語)
- (ア) あります
(イ) います

問 279 線を、() 内の丁寧語を用いて書き改めよ。

- (1) ただいままでは別のこともあらず。(候ふ)
(平家物語)
- (2) よくさまざまなるものどもこそありつれ。(侍り)
(源氏物語)

問 280 線を、丁寧語に注意しながら現代語訳せよ。

- (1) その人ほどなく失せにけりと聞きはべりし。
(徒然草)
- (2) つれづれ慰みぬべき物語やさぶらふと尋ね参らせ給へりけるに、
(無名草子)

●丁寧語

話し手(書き手)が、聞き手(読み手)に
対して敬意を表す言い方。

月見ありくこと侍りしに (徒然草)

(月ヲ見テ歩クコトガアリマシタガ)

……徒然草の読み手に対する敬意を表す

●主な丁寧語一覧

丁寧語	現代語訳
侍り	あります
候ふ	おります
侍り	します
候ふ	ございます

●「候ふ」は、平安時代には「サブロウ」、鎌倉時代以後は「ソウロウ」と読む。

補助動詞

問 281

線の敬語動詞を、敬意のない動詞に直せ。

(1)

二三日はつやつや物ものたまはず。

(沙石集)

(2)

そのをりは、左京大夫とぞ申しし。

(大鏡)

(3)

君、「知らばや」とおもほしたり。

(源氏物語)

(4)

御琴の音をだにうけたまはらで、

(源氏物語)

問 282

線の敬語動詞のうち、補助動詞を選べ。

(1)

かぐや姫少しあはれとおほしけり。

(竹取物語)

(2)

よきほどに出でたまひぬれど、

(徒然草)

(3)

大原におはしますとばかりは聞きまゐらすれど、

(建礼門院右京大夫集)

問 283

線を、補助動詞に注意しながら現代語訳せよ。

(1)

竹の中より見つけ聞こえたりしかど、

(竹取物語)

(2)

いみじう興じおはします。

(大鏡)

問 284

線のうち、補助動詞はア・イのどちらか。

(1)

帝、御衣を脱ぎてたまふ。

(源氏物語)

(2)

あさましきまで目を驚かしたまふ。

(源氏物語)

(イ)

御笛をたてまつる。うち笑ひて、取り給ふ。

(源氏物語)

(ア)

見捨てたてまつる悲しくて、

(更級日記)

●敬語の動詞は、次の二つに分けられる。

(1) 敬意のない動詞と異なった形をとる。

言ふ のたまふ (オツシヤル)

(2) 敬意のない動詞について、敬意を加える働きをする。これを補助動詞という。

言ふ 言ひたまふ (オツシヤル)

言ふ 言ひまゐらす (申シアゲル)

●敬語の補助動詞は数が少ないので、一気に覚えてしまうこと (P 181・P 183・P 184 参照)。

●敬語の補助動詞の中には、次のように本来の意味を持つ動詞としても使われるものもある。

	意味
たまふ	おくになる・くなさる
たぶ	お与えになる
たうぶ	お与えになる
おはす	おくになる・くなさる
おはします	いらつしやる・おいでになる
たてまつる	さしあげる

まっす	さしあげる・いたす
まゐらす	申しあげる
きこゆ	さしあげる・いたす
きこえさす	申しあげる・いたす

敬意が二つ重なる

問 289

——線には、どんな種類の敬語が重ね用いられているか。(ア)ウから選

べ。

(1) いかにかくいふぞと申し侍りしかば、
(徒然草)

(2) かぐや姫に見せ奉り給へ。
(竹取物語)

(3) 人のそしりをもえはばからせたまはず、
(源氏物語)

(ア) 尊敬語＋尊敬語 (イ) 謙讓語＋丁寧語 (ウ) 謙讓語＋尊敬語

問 290

——線の敬語は、だれに対する敬意を表しているか。

(1) (かぐや姫は) いみじく静かに、公に御文奉り給ふ。
(竹取物語)

(2) (大納言が) 御鷹の失せたる由を奏し給ふ時に、帝もののたまは
(宇治拾遺物語)

ず。

(3) 淑景舎、東宮に参り給ふほどのことなど、いかがめでたからぬこと
(枕草子)

問 291

——線は、(ア)二方面への敬意 (イ)二重尊敬 (ウ)自尊敬語のうちどれか。

(1) (帝は)「汝が持ちて侍るかぐや姫を奉れ。顔かたちよしときこしめ
して、御使ひを給ひしかど、かひなく見えすなりにけり。」と仰せら
る。
(竹取物語)

(2) 中納言の君参りたまへり。
(源氏物語)

●二方面への敬意

一つの動作に対して、話し手(書き手)が、動作の主と動作の相手とに対して、同時に敬意を表す言い方である。

謙讓語と尊敬語が同時に用いられる。

(帝が) (皇子を) 入れたてまつりたまふ。
(オ入レ申シアゲナサル)

「たてまつり」|| 謙讓語で、「入れ」という動作の相手(皇子)に敬意。

「たまふ」|| 尊敬語で、「入れ」という動作の主(帝)に敬意。

だから、「たてまつりたまふ」と重なる
と皇子と帝の二方面への敬意となる。

●二重尊敬

尊敬語を二つ重ねて用い、動作の主に対して特別高い敬意を表す。最高敬語とも言
う。

(中宮が) 笑はせたまふ。

「せ」も「たまふ」も、動作の主(中宮)に敬意を表す。

地の文で、二重尊敬が用いられるとき、動作の主は、天皇・皇后・皇子などの最高

敬意の対象

問 285 次の尊敬語は、だれに対する敬意を表しているか。

- (1) 今は昔、小野篁といふ人おはしけり。
(宇治拾遺物語)
- (2) 童よりつかうまつりける君、御髪おろし給うてけり。
(伊勢物語)

問 286 次の謙譲語は、だれに対する敬意を表しているか。

- (1) かぐや姫を養ひたてまつること二十余年になりぬ。
(竹取物語)
- (2) 親王に、右馬頭、大神酒まゐる。
(伊勢物語)
- (3) かぐや姫、答へて奏す。
(竹取物語)

問 287 次の丁寧語は、だれに対する敬意を表しているか。

- (1) 桜の花の散りはべりけるを見て詠みける、
(古今集)
- (2) 「波の下にも、都のさぶらふぞ。」と二位の尼が安德帝を慰め
(平家物語)

問 288 次の敬語は、だれのだれに対する敬意を表しているか。

- (1) 三位うせてのち、帝この笛を召して、吹かせらるれど、
(十訓抄)
- (2) 大将こそ、宮抱き奉りて、あなたへゐておはせ。
(源氏物語)
- (3) 二年が間、世の中飢渴して、あさましきことはべりき。
(方丈記)
- (4) 翁、皇子に申すやう、「いかなる所にか、この木はさぶらひけん。
(竹取物語)
- あやしく、うるはしく、めでたき物にも。」と申す。

●敬語とは、話し手がだれかに敬意を表すために用いるものだが、その「だれか」は次の三者のいずれかである。

- ① 動作の主 (↑尊敬語)
- ② 動作の相手 (↑謙譲語)
- ③ 聞き手 (読み手) (↑丁寧語)

●敬語の問題で頻出重要なものに、次のような問いかけがある。

だれのだれに対する敬意を表しているか
答え方をパターン化して覚えておこう。

だれに 対する	だれの	
	手紙文	会話文
丁寧語	書き手 (作者)	話し手・書き手
謙譲語	動作の主 (動作をする人)	動作の相手 (動作を受ける人)
聞き手・読み手		

多義の敬語動詞

問 292

線「まゐる」の敬語の種類を答え、意味も書け。

- (1) 心地もまことに苦しければ、ものつゆばかりもまゐらず。(源氏物語)
 (2) 師走になりて、またまゐる。局してこのたびは日ごろさぶらふ。
 (更級日記)

- (3) 御髪まゐるほどだに、もの憂くせさせ給ふ。
 (源氏物語)

問 293

線「たてまつる」の敬語の種類を答え、意味も書け。

- (1) 宮は白き御衣かんぞどもに紅の唐綾をぞ上にたてまつりたる。
 (枕草子)
 (2) 宮のおはします御几帳みきようのそばより、御笛をたてまつる。
 (源氏物語)
 (3) 法性寺の程までは御車にて、それよりぞ御馬にはたてまつりける。
 (源氏物語)

問 294

線「はべり」「さぶらふ」は、(ア)(イ)(ウ)のどれか。

- (1) かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。
 (源氏物語)
 (2) この太秦殿にはべりける女房、
 (徒然草)
 (3) 北山になん、某寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる。
 (源氏物語)
 (4) いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、
 (源氏物語)
 (5) つれづれなくさみぬべき物語やさぶらふ。
 (無名草子)

(ア) 謙讓の動詞 (イ) 丁寧の動詞 (ウ) 丁寧の補助動詞

●敬語動詞の中には、尊敬と謙讓、あるいは謙讓と丁寧の二種の意味を持つ語がある。多義語でもあるのでしっかり覚えておこう。

さぶらふ・はべり		たてまつる		まゐる	
丁寧語	謙讓語	尊敬語	謙讓語	尊敬語	謙讓語
①あります・ございます ②します・ございます (補助動詞)	①お仕えする・おそばにいる	①召しあがる ②お召しになる ③お乗りになる	①さしあげる ②申しあける・ういたす (補助動詞)	①召しあがる	①参上する・お伺いする ②参詣する・お参りする ③さしあげる ④(何かを) してさしあげる

たまふ

問 295 「訳」を参考にしながら、に「給ふ」の活用語尾を記せ。

(1) よきほどにて出で給ぬれど、
(徒然草)

「訳」 ちょうどよい頃合いでお出になったけれども、

(2) 堪へがたう思ひ給つるを、
(枕草子)

「訳」 たえがたく思いましたが、

(3) うちうちに思ひ給さまを、奏し給。
(源氏物語)

「訳」 内々で私の思っていますことを、天皇に申しあげてください。

問 298 線の「給ふ」は、尊敬語か謙讓語のどちらか。

(1) まことそらごと見給へむとてまうで来つるなり。
(宇津保物語)

(2) 世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。
(源氏物語)

(3) いとかしこしとなむ思ひ給ふる。
(枕草子)

(4) かの大納言の御女ものしたまふと、聞きたまへしは。
(源氏物語)

問 297 線を、「給ふ」に注意しながら、現代語訳せよ。

(1) 六衛府の官人の禄ども、大将たまふ。
(源氏物語)

(2) 尋ね聞こえまほしき夢を見たまへしかな。
(源氏物語)

(3) 「あめの下をさかさまになしても、思ひたまへよらざりし御ありさ
まを見たまふれば、よろづいとあぢきなくなむ」と聞こえたまひて、
いたうしほたれたまふ。
(源氏物語)

●「たまふ」の活用には次の二種ある。

(1) 四段活用

語幹	たま
未	は
用	ひ
終	ふ
体	ふ
已	へ
命	へ

(2) 下二段活用

語幹	たま
未	へ
用	へ
終	(ふ)
体	ふる
已	ふれ
命	〇

●四段活用の「たまふ」の働き

(1) お与えになる(尊敬語)

人に若菜たまひける御歌。
(古今集)

(2) 人二若菜ヲお与えになつタトキノオ歌
くなさる(尊敬の補助動詞)

御子さへ生まれたまひぬ。
(源氏物語)

●下二段活用の「たまふ」の働き

聞き手を敬って自己の動作を謙遜する。

次のような性質を持っている。

(1) 「謙讓語」と呼ぶ。

(2) 会話文・手紙文に用いる。

(3) 自己の動作につく。

(4) 「思ふ」「見る」などにつく。

(5) 「です」「ます」と訳す。

朝見たまへむ

(今昔物語集)

●複合動詞に下二段の「たまふ」がつくとき

は、次のように、間に割り込む形となることが多い。

思ひ立つ↓思ひたまへ立つ

見分く↓見たまへ分く